

みなと 人生劇場 場

港区民の手記を元に地元作家青木健一氏が綴る(当地人情劇シリーズ。第八弾は、田中在住の女性が辿った愛と涙の家族物語、港区版おしん。本紙終刊につき、続編を一挙掲載します。

こううんばし そら

幸運橋の空 (十六)

(前号まで) デイサービスに通う久美子は回想録を残すことにした。—大正十年、六人兄弟姉妹の長女として浪速区に生まれた久美子は博打狂の父に苦労させられながら奉公の連続で家族を助けた。引越した港区でも子守奉公。十三歳で家族と別流。母と宮幸運橋の海産物店で一家を支えた。大戦下の昭和十七年、船大工の大東正義と結婚も夫は召集され南方へ。大阪大空襲で港区は壊滅。疎開先の愛媛で二十年八月終戦。夫は二十一年帰還。義父母との生活で栄養生調になり、夫はあゝ決断をしてくれた—

● 夫の従兄宅へ引越す

「好きならうちに食べられるので暮らさ—」。口にお腹が大きくなっているにもかかわらず、義父母に遠慮して満正に食べられない私を見て、夫が決断してくれたのは、愛媛県上灘でのこの義父母との生活に見切りをつけ、引越すことだった。この決断にはまた、造船の仕事を手伝わせていた義父が給料を充分払わなかったことへの不満も後押ししていた。

その時、同じ上灘の、川を挟んだ土地で夫の従兄が造船所を営んでいたのだが、夫はこの仕事を手伝いながら、その従兄宅の一階で暮らすことになったのである。その従兄は義父の造船所で見習いから育てられ、自らも造船所を持つまでになったのだった。

面田(めんた)いこの従兄の妻は葬儀道具屋を営んでおり、久美子らの部屋には葬式に使う道具がいろいろ置いてあって、慣れるまでは何とも複雑な気分が過ぎたものだった。

その造船所で夫は一日百二十円受け取った。義父からもつよりかなり高い給料だったが、当時は物価も口上(くわじょう)上がる時勢へ、一日百四

十円は必要だった。それで、久美子の持っている時計や帯などを父に頼んで松山の知人などに売りに行ってもらった。「あんたこの品物はみなええ」とそれらはけっこう良い値で売れたので、生活はそれで随分と楽になった。

● 長女・珠美を出産 大阪へ

昭和二十一年(一九四七)年九月、長女・珠美が生まれた。夫との間に誕生した初めての命に、久美子はこの上ない幸福感を味わうことが出来た。喜怒哀楽をあまり表わさない夫も、恐ろしく同じ気持ちだろうと久美子は思った。もちろん久美子の父母や義父母も孫の誕生を心から喜び祝福してくれた。学校にもろくに行けなかった自分にこんな人並みの幸せが訪れるのが、久美子には本当に不思議でならなかった。

出産には母が来て世話してくれたが、すぐに大阪へ帰った。その頃には既に父母や弟妹たちは大阪へ戻り、戦争途中まで久美子らが商売していた幸運橋市場の一角に住んでいた。

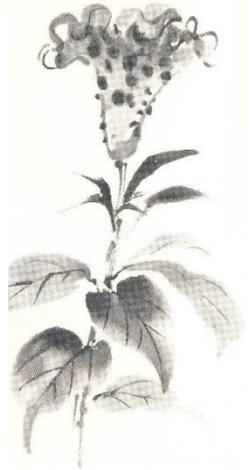
ところで、その時、久美子らが住んでいた夫の従兄宅の一階は、部屋の真ん中に階段の降り口があり、絶えず下の様子を気にしながら暮ら

さなければならなかった。出入りにも気を遣った。そんな様子を母から聞いた父は、久美子らの所へやって来て言った。「気兼ねして暮らしてると違つか？ 大阪へ出て来たらどうや。バラックでも建て住んだらええねん」。それで久美子ら親子三人は大阪へ出ることに決めた。長女・珠美が五カ月の時だった。

松山市と上灘の間「郡中」といっ町があり、そこに、昔、久美子らの海産物店へよく買いかけてくれた心安かった男性の母親が住んでいた。久美子らは柳行李などの荷物をその家に一時預かってもいい、ほとんど着の身着のまま、手ぶらで汽車に乗ったのを覚えている。

● 母はバラック住まい

昭和二十三年（一九四八）年、大阪へ出た久美子らは、初めはバラックでええから、よう働いて金貯めて、ちゃんとした家建てよ」といふ父の言葉に従い、まずは父が田中元町二丁目（空襲で焼けるまで住んでいた所だった）に建ててくれた粗末なバラック建ての家に入った。父はまわりに畑を作り、鶏も飼えるようにしていた。隣には、この世既に結婚していた



すべ下の妹・寛子の夫婦が、父に作ってもらったバラック住居に住んでいた。つまり姉妹の一族が隣り合わせて暮らすことになったのだ。

この焼け跡の新居から、夫は毎朝、請負で船大工の仕事に出かけ、一方、久美子はわずかなことにも始末して貯蓄に励んだ。服など買わずにすむ物はできるだけ買わないようにした。船大工として何事にも器用だった夫は、空襲で倒れたままになっていた檣の電信柱を持って帰り、製材所で切ってもらって、筆筒、お膳、水屋、こみ箱、蒸籠などを次々とこしらえた。

● 相変わらず世話好きだった父

父は大阪へ戻ってから久美子家族のため懸命に働いてくれたが、他人への親切も相変わらずだった。

まだ久美子ら親子二人が大阪へ帰る以前のこと。幸運橋市場の建物が焼け残っているのを目

を着けた父は、戦争で家をなくした人たちのためにその二階を「アパート」のようにしたってくれ」と役所と交渉を始めた。幾つもの部屋に仕切らせ、共同水道や便所、ベランダも作らせ、「家賃も電気代もフシが集めるから」と約束して、多くの人たちを入居させた。

そんな調子で、のちには、今なお使われている田中住宅の建設にも一肌脱ぎ、入居人の身元保証人になったりしていた。また、「敗戦でひしがれた日本人の心にひと時の笑いと安らぎを」とでも考えたのが、焼け跡に小屋を建て、芸人と呼んできて芝居や俄（即興の滑稽な寸劇）を演じさせたことも何度があった。

● 父の死

その父は昭和二十四（一九四九）年八月、六十二歳で他界した。死因は胃潰瘍だった。だんだん食べられなくなり、痩せ続けて、最後は七貫目（三十キログラム足らず）ほどになり、家で寝たきりになった。臨終には母や子供らが枕元を囲み、葬式には、幼いころ父の里へ養女に出されていた静子（久美子の姉）も参列することができた（父に世話になっていた湯浅といっ知

人が呼んでくれたのだ。

博打と女遊びに明け暮れ、随分と母や久美子や子供を困らせた父だったが、それでも母が別れなかつた大きな理由は、その稀に見る情の厚さと世話好きの性格だったと久美子は見ている。父はそんな母の気持ちを知つてか知らずか、最後まで自分流を貫いた、実に幸せな生涯だったと久美子は今も信じている。

父といへば、久美子は今でも時々、こんな光景を思い出す。それはまだ久美子ら兄弟姉妹が小さかつた頃のこと。博打が過剰で母に追い出されても、父は「二三日するうちに帰って来た。そして、上りの口から食卓をのぞき込みながら言った。「みんな「飯食へてるんか。ええなあ。ワシも入れてんか」。その子供のよつな無邪気に「思わず気がゆるんだのが、母は」しようにない」とこつた様子を父を上げてやり、いつものよつこ子供たちと一緒に「飯を食へよ」とせのめだった。

● 長男誕生 自力で一軒家

父がぐくむつて三カ月ほどだった昭和二十四(一九四九)年十一月、長男・義文が生まれた。

初めての男孫の誕生を祝つて、まだ上灘にいた義父母から紙の鯉のぼりが贈られてきた。四大家族となつて久美子らはますます張り切り、貯蓄にも精が出た。

昭和二十五(一九五〇)年、大阪へ戻つてから約二年で三万円が貯まった。それで建築資材を購入した。そして夫の船大工の腕を生かし、自力で平屋の一軒家(一畳と六畳の二部屋)を建てた。

土地は昭和二十三(一九四八)年から港区で始まつていた「仮換地指定」水害対策を目的にした「港区復興土地区画整理事業」の一環の中で割り当てられた十三坪だった。ちなみに、この土地は現在の久美子の家の目と鼻の先だった。またこの時、久美子らの隣のバラックに住んでいた妹・富子夫婦は八幡屋住宅へ移り、その妹夫婦への割り当て分と母への割り当て分を合させたかなり広い土地が母のものとなった。そしてこの土地を使って、母はのちに下宿屋を始めたのだった。

この時、義父がどこから調達したのが、瓦を船に積んで運んでくれ、久美子らはそれを家を

の屋根に使わせてもらった。

● 次男・次女の誕生、義父も大阪へ

その年(昭和二十五年)の秋、ジェーン台風が京阪神地方を襲つた。高潮で港区のほぼ全域が浸水したが、幸い久美子らの家は浸からずですんだ。それでも「復興支援」といつことで大阪市から九万円借りることができ、壁の修理などに充てることができた。その後は毎月十円ずつ、当時肥後橋にあった幸福銀行へ返済に行つた。

昭和二十六(一九五二)年八月、次男・正敏が生まれた。サンフランシスコ講和条約や白米安保条約の締結に賛否が渦巻き、国論が二分されたが、「敗戦国日本がやつと世界の国と対等に付き合える時代が来たんや」と、多くの国民が何となく希望と自信のよつなものを抱き始めた年だった。

昭和二十七(一九五三)年、義父母が大阪へ戻つて来た。夫の兄・利武が先に大阪へ出、久美子の父の世話で田中住宅に入り、造船所で働いていたので、それを頼りに上阪したのだ。この義兄は復讐してしばしば上灘にいたが、最

初の嫁が「あんなお父さん（義父）とはよう喜
らされた」と出て行ったまま帰ってこないの仕
方なく離婚し、上灘に居る間に再婚していた。
義父母は、次男夫婦（久美子）には既に子供
が三人いるし、同居は無理と思ったようだった。

昭和二十八（一九五三）年七月、次女・マコ
リが生まれた。この年、珠美は八歳、義文は四
歳、正敏は一歳、二子供四人の重みは久美子夫
婦を心地下へ刺激し、撃を握る夫・正義の手に
もいよいよ力がこもった。

● 母が下宿屋を営む

昭和二十八（一九五三）年ごろ、父が死んで
束縛が取れたかのように、まだ五十四歳くらい
だった母は田中元町二丁目の久美子らの家の隣
で下宿屋を始めた（その土地は昭和十五年の
「仮換地指定」で母が手に入れたものだった）
先述、女中一人を雇い、計八部屋（八畳間が三
つ）と六畳間が三つ）に常時二十数人が暮らし、
八畳間のテーブルで下宿人みんなが食事をとつ
た。そこにはたぐいまじり港濱労働者もいわば
入墨を彫り込んだヤクザもいて、どこかへ色ど
な人が一つ屋根に暮らしていた。



そんな住人から母は「ええ人や」と好かれて
いたが、久美子には皆が「姉ちゃん怖い」と
一目置いていた。といつかは、久美子は何に対
しても怖いもの知らずのようだったが、それ
だった。男としての喧嘩にも臆する（となく仲
裁に入るの）で、母は「お前がやられたらどうす
んねん」と止めたが、久美子は平気だった。

あの朝（その日は母がいなかった）、沖仲仕が
築港での夜通し作業が明けて寝ていた時だった。
隣の部屋の創価学会の信者が大きな声で勤行

を始めたのだ。「ごつい体格の沖仲仕は目を寛
まし、「寝られへんやないか！」と怒鳴った。
その声を耳にした久美子はとっさに「喧嘩にな
ったらえらいこつちゃ」と思い、その沖仲仕よ
り先に学会員の部屋に飛び込んだ。手を引ば
って、「さ、早よ逃げ！ あつち行き！」と外
へ出してやり、なんとか事なきを得た。他の下
宿人たちは怖がって出てこないか、黙って見て
いただけだった。そんなことが度々あった。

また、母の所には仕事柄、当時はまだ貴重品
だった冷蔵庫の大きなのがあり、ガスも引いて
あった。しかし、夫の収入の少ない久美子の家
はガスも引けず、冷蔵庫もなかったの、よく
生ものなどを母の冷蔵庫へ入れさせてもらい
に行ったものだった。

● 母は肝臓を患う

母はその下宿屋を営んでいた頃、肝臓を患く
して築港の船倉保険病院にかかったことがあつ
た。何回か入院したのち通院するようになった。
家（下宿屋）では辛いので枕を高くして、くま
るような格好で横になっていた。

その時、久美子の弟の善道夫婦はその下宿屋

の裏に小さい「隣建」の家を建てて住んでいた。母は医者に、「食事はお粥にするのでついでに」と言われたので、善道の嫁が母にお粥を作ることにした。が、そのお粥はいつも薄くてまずいものだった。それに、明け方も暮れ方も、添えものは梅干だけだった。

母は久美子を呼び、「久美子、お前がお粥作ってね」と言った。久美子はそれを聴いて腹が立ち、そばにいた善道の嫁を突き倒した。「あんたはよその人間でも木下の家へ来たんやで、私はここからよそへ行ったんやで、私がちよいちよい来たたら、『また小姑が来た』ゆつてあんたが笑われるんやで」。

その後、久美子は善道の嫁に代わって、二度三度丁寧にお粥を炊き、白身の魚やほつれん草なまぐしを付けるようになった。また、母が働けないものだから、下宿の食事を作りにも行った（女中はその洗い物をつと）。

ついでに世話もあって母の体は快方に向かった。船舶病院からの帰り、千舟橋の上で母は久美子に言った。「久美子が治してくれたんや。お前のお陰や。お前に家やわむ。田には涙がたま

っていた。久美子も泣きまじりになりながら答えた。「家なんかいらん。子が親に良しするんは当たり前や」。天保山運河に浮かぶ船が滲んでよく見えなかつた。

母はこの少しあとから創佛学会に入会し、選挙になると、公明党の日本議員のための熱心に走り回ったりするようになった。

● 母は裏判押して下宿屋を明け渡す

ところが、母は父に劣らず人のよいところがあって、よく言われるままにお金を貸してあげたりしていた。

下宿屋をしていたある時、近所の漆原という工務店が、三軒はじ家を建てたのに代金をもらえず困っていた。漆原は創佛学会の会員だったが、その同じ学会員が金を払ってつねないのだと母に泣きついてきたのだ。母はこの時まだ創佛学会には入っていないかったが、事情を聞いて深く同情し、裏判を押してあげ、自分の下宿屋を抵当に、漆原がどこからお金を借りるのを助けてあげた。しかし漆原はそれを返済できず、母はその漆原と一緒に恵我之荘（羽曳野市内）の百姓家へ隠れた。

結局、母は下宿屋を明け渡さねばならない羽目になり、代わりに同じ港区の千代見町（今井大、波除あたり）の文化住宅を充てがわれた。その入居人の敷金は家主が取り、毎月の家賃だけを母が集金して生活するという条件だった。

ところが元の下宿屋で母に面倒を看してもらっていた人たちが、母を頼ってその千代見町の文化住宅へ入居してきたのだ。母はその人たちの食事の世話などをしてあげるようになったり、いわば共同生活のような状態になったようになった。

ついでに数カ月を過ぎた頃、母は再び漆原のトラブルに巻き込まれてしまったのだ。そして、前と同じように漆原と恵我之荘の百姓家へ隠れ、結局、千代見町の文化住宅も手放すことになってしまった。

そんなトラブル続きのあと、母は八尾市民病院の付き添い婦として働き始めた。病院の近くの下宿に通った。そこ一年ほどしてから藤井寺市の坂本病院へ移り、やはりその付き添い婦として働いた。その時は病院の近くへ付き添い婦の会館というのがあり、母はよくこ寝泊

りしながら通ったようだった。母はこの時、六十八歳、久美子は四十歳、昭和三十七（一九六二）年二月の事だった。

● 船大工の夫の誇りと苦闘

このころ、久美子の四人の子供は十四歳から八歳までと育ち盛りだった。夫は家族のためによく働いた。

大工にも普通の大工、宮大工、指物大工といふところがあるが、それらの中でも「船大工」の技術が一番と夫はよく言っていた。

子供の頃から叩き上げて腕の確かな夫は、一社専属の下請け職人として、信州や下関や沖縄など全国各地、また上海など海外の木造船の修理などに呼ばれ、サンフランシスコ（関西汽船の客船）などで現地へ出かけては腕を振るっていた。夫の技術を伝え聞いて他の造船所や船会社から「うちへ来てくれ」と良い条件での引きがあったが、夫は「元請の会社で、自分を当てにしているのだから、そんな（大工）よごへ移る（大工）はむきごと」と頑なにその一社専属を通じた。

しかし、その頃は時勢が木造船が年々減り続



け、船大工の仕事は年々とも成り立たなくなっていた。当然のことに収入は不安定で、いつでも親子六人が食べていくのに充分ではなかった。月一回の給料日があり、一回の給料は八万円の時もあれば、雨が何日も降ったりすると三万円の時もあっていった具合だった。

夫は後年の平成元（一九八九年、七十歳で職を離れたが、そのあとでいっただったか、ぼそっと言った。「ようあんな（少ない）給料でいけたなあ。ちうやってくれたなあ」。夫が現役の頃、久美子は夫の懸命に働く姿を見て、収入面での愚痴は決して言わないように心に決めていたが、その言葉を耳にした時、「ああ、お父さん（夫）は分かっていたんや」と胸が熱くなった。

● 生命保険外交員

ともあれ、そんな厳しい家計状態でも子供た

ちはすくすく育っていた。それでもやはり子供たちの将来を考えると不安は募った。それで、母が坂本病院の付き添い婦として落ち着いたのを機に、久美子は働きに出ることにした。近所の秋田という久美子より少し歳上の女性の紹介で、その年（昭和三十七年）の一月から住友生命に保険外交員として勤め始めたのだ。

ありがたいことに、酒屋、散髪屋、米屋、それに父の博打友だちだった人足出しの親方など、近所の人たちが、回つから次々と契約し、紹介もしてくれた。お陰で、普通ならまず親戚から契約させるところを、その必要もないくらい次々と成約を得ることができた。こうして夫の収入不足を補って余りあるほどの収入が得られ、それでカスを引き、冷蔵庫も買った。また長女が港中学校から市岡商業高校へ進学する時（昭和三十八年三月）には、喜れのボーナスで貯めていたお金を入学金に充てることもできた。この仕事を通じて久美子が強く思ったのは、人間何をするにも人柄・誠意・信用が第一だということだった。家族の生活のために働くのだから、成約を多く取って成績を上げることが

もちろん頭であったが、家々を回る時に最も心がけたのは「住友の名を汚さないように」ということだった。その結果が先に述べたような営業成績になったのだと久美子は今も思っている。また久美子が働いた六年半の間、こうした仕事に付き物のトラブルは、一件もなかった。

● 長男の就職と非行

長男・義文は昭和四十（一九六五）年春、港南中学校から南海電鉄の試験に合格した。中学時代は成績もよく、付き合った友だちも資産家の息子など勉強のよい出来の子ばかりだった。また科展に入選したこともあつたらしい、絵も上手だった。公立高校に合格するだけの実力は充分あったが、「姉ちゃん（珠美）が高校（市岡商業高校）へ行つて、お金もかかるから…」と自分の意志で就職の道を選んだのだった。ちなみにこの頃、しほこの義文が十八歳の時、家のまわりの庭にめした「階建」の家と交換して移り、現在に至っている。

義文は小さい頃から姉や弟妹想いの優しい子で、同電鉄の信託係として働き始めてからも給料口には必しも姉や弟や妹に何か買つてやめて

いた。

ところが、付き合った友だちが悪かったのか、就職後はしばらくしてから、彼らと組んで集団万引き事件を二回も起したのだ。その中で根崎署、南署、天王寺署から家に連絡があり、久美子が出回った。久美子は警察官「親の私が行き届かませてもらった。全て親の責任です」とひたすら頭を下げた。それは、「こんなことがあつても義文を守る。」義文が『親から見離された』とだけは思わんように、「と」といつ必死の気持ちからだった。

家に引き取つたあとも義文との葛藤は続いた。夜遅くまで二人で膝を突き合わせ、自分のしたことがどれだけ世の中に迷惑をかけることを夫と二人で懇々と語つて聞かせた。朝は朝で、仕事に出たがらない義文を夫が自転車で弁天町駅まで送つて行った。「とにかく仕事だけは休まないといい。」と、夫も申すのを聞いて、

長男のことに構ひ切りの久美子たちに、他の子供たちが堪へ兼ねたように言つたことがあつた。「何で義文兄ちゃんばかりか……。そんな時、久美子と夫は言った。「兄ちゃんは高校も

行かんと、みんなのために働いてくれているやろ？ そのお陰で、みんなは学校へ行けるんやろ？」と。

● 長男の死

そつした甲斐あつて、なんとか義文も立ち直る気配を見せ、万引きを友だちから誘いがあつても断わるようになった。さうには自分からそつした交友関係を断ち切り、「僕、あいつらとケリつけたで」と晴れやかな表情で久美子や夫に話せるまでにもなった。そして、仕事にもだいぶ慣れ、「もう一人前になつたから、給料もよつけもらえろぞ」などと皆で喜ぶ合つていた昭和四十三（一九六八）年のお盆休みのことだった。オートバイが好きだった義文は、給料で中古品を買い、傷んだ箇所を自分で修理し、四国の旅に出発したのだ。高知県の土佐久礼の海沿いの国道を走っていた時だった。並んで畑側を走つていたらトラックが方向転換の表示もななくいきなりカーブを切つたのだ。義文はその下敷きになつた。

土佐久礼の病院から電話を受けた時、久美子は藤井寺市の坂本病院で母の世話をしていた

(母はこの時、この病院の付き添い婦をしてい
たが、自身が体を壊してしまい、同病院の一室
で療養していたのだ。すべて夫に知らせ、一緒
に土佐久礼へ向かった。既に夕方で、汽車を乗
り継いで病院(坂本病院)といひ、偶然にも母の
病院と同じ名前だった。今は残っていない)に
着いたのは、あくまで口の前だった。

義文は意識不明だった。紫色のタイヤの跡が
体を貫いていた。が、それ以外にひどい外傷は
見当たらなかった。後遺症は残るもの、
命は助かると思つた。

しかし数日後、「この日も無事やったなあ」と
安堵して盆の送り火を焚いていた八月二十八日
夜、義文は亡くなった。皮肉にもオートバイは
無傷だった。まだ十八歳の若さだった。

それからしばらくは、魂が抜けたよつな日々
が続いた。長男の死から一月後の九月、久美
子は半年半動続した住友生命を退社した。長男
の死以来、何をやる気も失せたよつな久美子
を見兼ねて、手続きはみな夫がしてくれた。

● 母の晩年と死

昭和二十七(一九六〇)年から藤井寺の坂本



病院で付き添い婦をしていた母は、そのうち自
分が体を悪くしてしまい、同病院の一室で療養
し、久美子が世話に通っていた(先述)。そんな
母を見て久美子ら兄弟姉妹は相談し、母を妹の
電子夫婦に引き取ってもらうことにした。その
時、電子夫婦の住居は港区の八幡屋中亭で、
夫は日立造船に勤めていた。以後、弟たち(善
道・捨五郎・昭九郎)が二万円ずつ久美子が
五千円、計六万五千円を月々電子夫婦に渡すこ
とになった。

ところが、電子夫婦は毎月それだけのお金を
受け取りながら、その世話の仕方は心がこもつ

ていなくて、しかも言い難いものだった。母の体
に良いからと届けた梅酒も、自分たちが飲んで
しまつて始末だった。

母が電子夫婦宅に引き取られて一年ほどたつ
た頃、見兼ねた弟の善道が「うちで看るわ」と
母を車で平野区喜連の市営住宅へ連れ帰った。
そして母は、その善道宅で晩年の約五年間を
過ごしたのだった。

昭和五十一(一九七六)年正月、母は八十一
歳で亡くなった。死因は餅を喉に詰めての窒息
だった。

母は父の博打癖や女癖の悪さでは随分と苦
労したが、その種のごとは昔なら普通のことで、
それで離婚するなど頭から考えなかつたよつだ。
結婚後は、そんな夫のもとで子供たちをどう守
つてやれるかだけを考へて生きてきた。そして、
そんな自分を「不幸だった」とか「苦勞した」
とか考へたこともないよつだだった。

父の死後、自分の意思であれやこれやに手
を出していた姿(痛い目にも遭っていたが)から
は、よつやく束縛から解放された伸びやかな
よつなものを感じられた。それは娘の久美子

の目にも微笑^{ほほえ}みかけて映りこむわがらは好きになりに生きたらえねむ」と応援したいようになえ持ちで母に接していたことが、久美子には今も思い返される。

● 夫の晩年と死

夫は船大工として平成元（一九八九年）の七十歳まで働いたが、平成十三（二〇〇二年）十一月十日、八十四歳で亡くなった。

夫は何事にも几帳面^{きちょうめん}で自分に厳しい反面、周りには優しい人だった。久美子と何かで言い争っても、「これが分からんか！ 馬鹿！」と口癖^{くちへく}のよう^{よう}に言ったが、決して手を掛けることはなかった。また久美子の作るおかず^{おかず}に文句を言うことも一度もなかった。外食を嫌い、家で久美子がこしらえた料理を食べるのを好んだ。夫のために何か買^かってあげようとする、「もったいない」と文句を言ったが、それが久美子や子供たちの物なら「もうかそうか、買^かったね買^かつたね」と機嫌^{きげん}がよくなった。口数が少なへ、人と喋るのが苦手で、交渉^{こうしょう}^しとは何れも久美子に任せていた。

仕事を離れてからの十数年間は持^もちこ

もなへ、家にいたが、「背中が痛い」と言いつつ、近くの喜馬外科^{きば}へ貼り薬^{はりぐすり}をもらいに毎日自転車^{じてんしゃ}で通^{かよ}ったりしていた。それでも、若い時から手先の器用^{きよう}だった夫は、板の間^{いた}な家の中をあれこれ修理^{しゆり}したりしていた。

最後は体が弱^{よわ}って、家でほとんど寝^ねたきりになった。寝^ねる前^{まへ}にはゆへに軍歌^{ぐんか}を口ずかしていた。久美子が横で歌^{うた}つのを聴^きくのも好きだった。「もつとめつとりの歌^{うた}してね。分かれへんやないか」とうづのぼるゆい^{ゆい}の三曲^{さんきょく}歌^{うた}ってあげると、いつの間にかスースー寝息^{ねいき}を立てていた。

ほどよい硬^{かた}さの便^{べん}が出る、うよほど嬉^{うれ}しかったのか、「お母ちゃん、お母ちゃん、ええ便^{べん}が出たで」と便所^{べんじょ}から子供^{こども}のよう^{よう}に私^{わたし}に声をかけた。「ほんまや、お父さん、ええ便^{べん}出たなあ」「そやろ。便器^{べんき}の大便^{だいべん}を眺^{なが}めながらそんなことを言^い合^あい、顔を臭^{くさ}わせて喜^{よろこ}び合ったことが、久美子には昨日^{きのう}のよう^{よう}に思^{おも}い返^{かえ}られる。

また、夜中に便所^{べんじょ}に立つ時には久美子が付いて行^いくようにしていたが、自分一人^{ひとり}で立つ時もあった。うへなな一週間^{いっしゅうかん}は以前の寒^{さむ}い晩^{ばん}だった。久美子を起^{おこ}すず一人^{ひとり}でトイレ^{トイレ}に立った夫は、

途中で大便^{だいべん}を漏^{もら}らしてしまった。「お母さん、お母さん出^でてしましたわ」「えい、いや、えい、いや。」「久美子はすべ^{すべ}に起きて湯^ゆを沸^{わか}かし、お尻^{おしり}や下着^{げき}に付いた便^{べん}や廊下^{らうか}に流れ出した便^{べん}をきれい^{きれい}にタオルで拭^{ぬぐ}い去^いってあげた。そんなことも、今^{いま}では久美子には懐^{なつか}かしく思^{おも}い出^でされる。

夫の死因^{しゆいん}は老衰^{らうすい}で、最後に併発^{へいはつ}した肺炎^{へんえん}だった。初め喜馬外科^{きば}に「晩入院^{ばんにゅういん}したが、医師^{いし}の「大きい病院^{びやういん}の方がええでしよう」との勧め^{勧め}で西^{さい}区^く境川^{さかいがわ}の多根病院^{たねびやういん}へ移^{うつ}った。次男^{じきなん}の正敏^{まさとし}が泊^{とど}り込^こんでくれた。

亡^なくなる前の晩、正敏^{まさとし}が久美子^{くみこ}を自転車^{じてんしゃ}の後ろ^{うしろ}に乗^のせて家^{いへ}まで送^{おく}ってくれた。その途中で、胸^{むね}に穴^{あな}を開^あけて酸素^{さんそん}を送^{おく}る「延命措置^{えんめいそち}」について正敏^{まさとし}と相談^{さうだん}した。医師^{いし}は延命^{えんめい}を勧め^{勧め}てくれるけれども、「これ以上^{これいじやう}と目^めして生き続けさせるんは可哀^{あはれ}相^あや。もつ五分^{ごぶん}生きだし、延命措置^{えんめいそち}を頼^{たの}むのは、やめようか」と。

多根病院^{たねびやういん}に入院^{にゅういん}して三日^{さんびつ}目の晩、子供^{こども}たち三人^{さんにん}に見守^{みまも}られながら、夫^{おとこ}は八十四年^{はちじゅうしねん}の生涯^{しゆが}を閉^とじた。久美子^{くみこ}が病院^{びやういん}に駆け付^{かけつ}けた時、既^{すで}に息^{いき}はなかった。顔^{かほ}には皺^{しわ}もなへ、とても安^{やす}らかな表^{あは}

情だった。

寄り添って五十八年間。久美子には申し分のない夫であり、また子供たちにとってはいい父親でいてくれた。家族のために真面目に精一杯働き、穏やかな性格で、子供たちをよく可愛かった。経済的には決して裕福だったとは言えなかったが、夫と巡り会えて、本当に心から幸せだったと久美子は思っている。

● 幸せな現在の私

久美子は現在、次男夫婦の世話で何の不安もなく過ごしている。平成五（一九九三）年頃から通っている港区弁天の在宅サービスセンター「ひまわり」のデイサービスでは色んなことがあるが、誰とも仲良くなれるよかつ心がけ、楽しい毎口を送れている。また苦労した分、他人に対して多少疑（うたが）い深いところもあるが、一方で普通の人に比べて相手の気持ちがよく分かるというところもあるようだ。

何年前か「ひまわり」のいかなどがあった。久美子が食後いつも座るソファに誰かが横になっについて、久美子のスペースがなくなっていた。久美子が困って立っていると、別の人が久美子



に向かって「あなたが座る座（ま）りつから、この人（横）になっっている人がゆっくりでけへんやんか！」と突っかかるように言った。久美子は呆（あ）げにこらわれ、また「何で私がこんなこと言われなあかんの？」と無性（むじよう）に腹（はら）が立った。よほど文句を言おうと思ったが、黙（も）ったまま堪（た）えて、そのあと皆で体操（たいそう）している間（あいだ）に言った。「もし喧嘩（けんか）してはうちかがこ（ひまわり）をやめるとなったら、職員さんが困りはる。それに、こんなことばどっちが勝つても嫌な思いだけが残るもんや」と。それで、体操がすんでからその人に言った。「よめんな。私が至（いた）らなかつたわ。堪忍（かたじけ）してな」。その人はこ（ひまわり）してくれ、結局その後はお互い何もなかつたように普通に喋（しゃべ）る合（あ）はるようになった。

また、こ（ひまわり）には、ただ来て食事

して帰るだけの沖縄出身の男性がいたのだが、ほとんど誰からも声をかけてもらっていないかった。手も足も不自由な上、自分から口を利（き）くことがほとんどないので、そんなものも無理なかつたのだが、そんな姿を見ると久美子は「ぞぞ寂しいやろな。いなか（沖縄）へ帰りたいやろな」などその人の気持ちを想像してしまうのだった。それで、帰る時にいつも「さよなら。また元気で会いましょな」と声をかけてあげるように笑（わ）い返（かえ）してやるようになった。

また、やはり苦労した分、お金のありがたみがよく分かり、始末はする方だが、困った人を見るときはこ（ひまわり）しておれないところもある。夫がまだ生きていた十数年前のことだが、雨の中をこ（ひまわり）歩いてきた浮浪者（うわらう）を見て思わず駆け寄り、「こ（ひまわり）で買（か）って食べ」と千円札を手渡したことがあった。数年前にも、よれよれの服を着た浮浪者が「ニ箱（あ）を漁（あ）っている姿を見て堪（た）らなくなり、五百円玉を手に入、近寄（ちか）りこ（ひまわり）でいな風（ふう）（格好）にしてもお金のえ持（も）つたらパンでも何（なん）でも買（か）えるから、わざわざけい（ひまわり）

で嘔吐して食べた。

久美子はまた、昔のじよをたぐりて覚えていて、それを昨日のじよのじよに詳しくしゃべっている。皆から「大東さんはほんとによつ覚えているなあ」と感心されている。皆で何か懐かしい歌を歌おうという時など、他の人は題名がなかなか口に出ないのに、久美子は迷わず『緑の地平線』など好きな懐メロの名を挙げるので、結局、それを皆で声をそろえて歌うことになる。また「名付けゲーム」という遊びの時に、ある物を見て閃いた「水都」という言葉が間髪おかず「口から飛び出したのよ、へ」「へえー、よ、よそんな言葉知ったはるなあ大東さん」と「タツツに驚かれた」ともあった。

● 周囲で感謝の学校行きたかった

今（この）じよで自分の九十余年の人生を振り返ってみると、本心に色々なことがあったなああと久美子は改めて感じる。そして久美子の人生とい

時その時を無我夢中で走ってきた連続のように思っている。その中で楽しいじよ、嬉（うれ）しいじよ、それ（これ）に言葉に出来ない辛いじよもたくさんあった。しかし、親を恨む（にく）気持ちには毛頭（もうとう）なかった。この世に生んでくれ、大変な苦労（くろう）をして育ててくれたといっただけで、父と母には本当に感謝している。また誠実な夫と巡り会え、優しい子供たちに恵まれて本当に幸せだったと思っている。それに、久美子（くみこ）が家族のことを親身に気がついてくれる多くの人たちにも助けられた。戦争をきむ大変な時代を潜り（ひそ）抜け、人並みの幸せに辿り着くことができたのは、全（まる）くじよした久美子（くみこ）をとり巻く人々の愛情のお陰（かげ）だと思っている。その申し分のない幸せの中で、ただ学校へ充分（たぶん）通えなかったことだけが、久美子（くみこ）には心残り（こころご）といえは心残りだ。なぜなら、字（あ）を読むことにはある程度（たぶん）できても、書くことがじよしても思（おも）うじよ（こ）ろ（ころ）が、自分の思（おも）いを文字（あ）にして人に伝える（つた）え（え）る（る）じよ（じよ）は、じよ（じよ）も（も）じよ（じよ）か（か）し（し）く（く）思（おも）いを（を）伝える（つた）えられるからだ。それにのじよ、同じ年の子供たちと同じ教室や運動場で思（おも）う存分（たぶん）勉強（べんきやう）した（した）遊（あそ）び（び）だ（だ）ら（ら）出（い）て（て）じよ（じよ）ら（ら）だ（だ）け（け）楽（たの）しか（か）つ（つ）た

だらうと想像するとい、返す返すも残念でならぬ。着物もいらなかった。お金（かね）もいらなかった。ただ学校へ行きたかった」とじよ（じよ）の（の）が（が）、久美子（くみこ）の（の）人（ひと）生（な）の（の）だ（だ）だ（だ）一（い）つ（つ）の（の）悔（く）い（い）である。

● 忘れぬ「幸運橋の空」

それにつけても、久美子（くみこ）が（が）未（ま）だ（だ）に（に）繰（くり）返（か）し（し）思（おも）い（い）出（い）す（す）の（の）は（は）、久美子（くみこ）が（が）十（じゆ）歳（さい）から（から）三（さん）年（ねん）間（かん）世（よ）話（わ）にな（な）った（た）奉（ほう）公（こう）先（せん）の（の）若（わか）い（い）女（にょ）主（しゆ）人（ひと）の（の）や（や）さ（さ）し（し）さ（さ）だ（だ）。昭（しやう）和（わ）七（しち）（一九三〇）年（ねん）の（の）あ（あ）の（の）雨（あま）の（の）日（ひ）。彼（かの）女（にょ）の（の）深（ふか）い（い）愛（あい）情（じやう）から（から）溢（あふ）れ（れ）出（い）た（た）あ（あ）の（の）親（おや）切（せき）な（な）行（い）為（ゐ）が（が）な（な）ら（ら）ね（ね）ば（ば）、今（いま）の（の）久美子（くみこ）の（の）幸（しあ）せ（せ）は（は）な（な）か（か）つ（つ）た（た）か（か）も（も）し（し）れ（れ）な（な）い（い）。

あ（あ）の（の）あ（あ）と（と）久美子（くみこ）は（は）じよ（じよ）つ（つ）や（や）く（く）家（か）族（ぞく）と（と）流（なが）れ（れ）て（て）き（き）母（はは）や（や）弟（あに）妹（いもうと）たち（ち）と（と）一（いっ）緒（しょ）に（に）幸（しあ）運（うん）橋（はし）市（いち）場（ば）で（で）海（うみ）産（さん）物（ぶつ）を（を）売（う）り（り）さ（さ）ば（ば）く（く）充（み）実（じつ）した（した）青（あお）春（はる）期（き）を（を）送（おく）れた（た）の（の）だ（だ）つ（つ）た（た）。その（その）忙（いそ）が（が）しい（い）日（ひ）々（々）の（の）合（あ）間（かん）に（に）ふ（ふ）と（と）見（み）上（あ）げ（げ）た（た）空（ぞら）。家（か）族（ぞく）と（と）共（いっ）に（に）い（い）る（る）じよ（じよ）の（の）幸（しあ）福（ふく）を（を）し（し）み（み）じ（じ）み（み）と（と）感（あ）じ（じ）さ（さ）せて（て）くれた（た）あ（あ）の（の）空（ぞら）の（の）青（あお）さ（さ）を（を）、久美子（くみこ）は（は）今（いま）も（も）忘（わ）れ（れ）る（る）じよ（じよ）が（が）でき（き）な（な）い（い）。

今（この）では（は）その（その）名（な）も（も）形（かたち）も（も）港（みなと）区（く）か（か）ら（ら）は（は）消（け）え（え）て（て）しま（ま）つ（つ）た（た）が（が）、「幸（しあ）運（うん）橋（はし）」は（は）文（ぶん）字（じ）通（とほ）り（り）、自（みづか）分（ぶん）に（に）幸（しあ）せ（せ）を（を）運（た）んで（て）くれた（た）じよ（じよ）に（に）、久美子（くみこ）は（は）思（おも）い（い）て（て）な（な）ら（ら）な（な）い（い）。